

# 「等質な空間について」

田丸 博士 (広島大学)

先端数学 (2012/06/08) 講義資料

# 1 導入

---

等質空間とは:

- 空間 集合, 距離空間, 位相空間, (可微分) 多様体, ...
- 等質 どの点の周りでも性質が等しい.
- 等質空間は, 群と関係する.
- ちなみに, 田丸の専門分野です.

本講義でやること:

- 等質空間の紹介.
- 「等質な集合」に話を限定して, 概要を簡単に紹介する.

## 2 群作用

---

### 2.1 群作用の定義

---

記号:

- 以下,  $G$ : 群 (単位元  $e$ ),  $M$ : 集合.

定義:

- $\Phi : G \times M \rightarrow M : (g, p) \mapsto g.p$  が 群作用  
: $\Leftrightarrow$  (i)  $\forall g, h \in G, \forall p \in M, (gh).p = g.(h.p)$ ,  
(ii)  $\forall p \in M, e.p = p$ .

記号:

- 群作用  $\Phi : G \times M \rightarrow M$  が存在することを「 $G \curvearrowright M$ 」で表し,  
「 $G$  は  $M$  に作用する」と言う.

## 2.2 群作用の例

---

例:

- $GL_n(\mathbb{R}) := \{g \in M_n(\mathbb{R}) \mid \det(g) \neq 0\} \curvearrowright \mathbb{R}^n$ .

( $\because$ )  $\Phi : GL_n(\mathbb{R}) \times \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^n : (g, p) \mapsto gp$  (行列の積) より.  $\square$

例:

- $O(n) := \{g \in GL_n(\mathbb{R}) \mid {}^tgg = I_n\} \curvearrowright S^{n-1}$ .

( $\because$ )  $\Phi : O(n) \times S^{n-1} \rightarrow S^{n-1} : (g, p) \mapsto gp$  (行列の積) より.  $\square$

レポート問題 (1): 次を示せ.

- $\forall g \in O(n), \forall p \in S^{n-1}, gp \in S^{n-1}$ .

- (ヒント)  $S^{n-1} := \{p \in \mathbb{R}^n \mid \|p\|^2 = 1\}, \|p\|^2 = {}^tpp$ .

## 2.3 推移的な作用

---

定義:

- $G \curvearrowright M$  が 推移的

$$:\Leftrightarrow \forall p, q \in M, \exists g \in G : g.p = q.$$

(i.e., どこからどこへでも移れる)

例:

- $GL_n(\mathbb{R}) \curvearrowright \mathbb{R}^n$  は推移的でない.

( $\because$ )  $0 \in \mathbb{R}^n$  は動かないから.  $\square$

例:

- $O(n) \curvearrowright S^{n-1}$  は推移的.

( $\because$ ) 線型代数の知識を使うとできる. 省略.  $\square$

# 3 等質集合の基礎

---

## 3.1 等質集合の定義のアイデア

---

粗く言うと:

- 等質 どの点の周りでも性質が等しい.

具体例で考察:

- 円  $S^1$  は, どの点の周りでも同じ (楕円はそうではない).
- その理由:

$\forall p, q \in S^1$  をとる. すると,  $S^1$  を回転させて  $p$  を  $q$  に移せる.

- 群作用の言葉を使うと:

回転群  $\curvearrowright S^1$  が推移的.

## 3.2 等質集合の定義

---

定義:

- 集合  $M$  が 等質 (正確に言うと  $G$  に関して等質)

$:\Leftrightarrow \exists G \curvearrowright M$  : 推移的.

例:

- 球面  $S^{n-1}$  は  $O(n)$  に関して等質.

( $\because$ ) 前に述べた通り,  $O(n) \curvearrowright S^{n-1}$  が推移的だから. □

### 3.3 群の剰余集合

---

記号:

- 以下,  $G$ : 群,  $K$ :  $G$  の部分群.

定義:

- 次を  $K$  から定まる同値関係:  $g \sim h \Leftrightarrow g^{-1}h \in K$ .
- 商集合  $G/\sim$  を 剰余集合 と呼び,  $G/K$  で表す.

注意:

- $G/K$  の元 (すなわち同値類) を  $[g] = gK$  などと表す.
- $K$ : 正規部分群  $\Rightarrow G/K$ : 剰余群 (または商群).
- ここでは,  $K$  は単なる部分群なので,  $G/K$  は群とは限らない.

## 3.4 等質集合の性質 (1)

---

定理 ( $G/K \Rightarrow$  等質):

- 次で定義される  $G \curvearrowright G/K$  は推移的:

$$\Phi : G \times (G/K) \rightarrow G/K : (g, [h]) \mapsto g.[h] := [gh].$$

( $\because$ ) 示すことは、以下の3つ:

$\Phi$  : well-defined, 作用であること, 推移的であること.

[ここでは推移的であることだけ示す]

[示すこと:  $\forall [h], [k] \in G/K, \exists g \in G : g.[h] = [k]$ ]

$\forall [h], [k] \in G/K$  をとる.

$g := kh^{-1} \in G$  とおく.

すると  $g.[h] = [gh] = [kh^{-1}h] = [k]$ . □

## 3.5 等質集合の性質 (2)

---

定理 (等質  $\Rightarrow G/K$ ):

- 集合  $M$  が  $G$  に関して等質,  $o \in M$ ,  $K := \{g \in G \mid g.o = o\}$   
 $\Rightarrow M$  と  $G/K$  の間に全単射が存在.

( $\because$ ) 写像  $f$  を次で定める:  $f : G/K \rightarrow M : [h] \mapsto h.o$ .

この  $f$  が well-defined かつ全単射を示せば良い. □

レポート問題 (2):

- 上の定理の証明を完成させよ.

用語:

- 上で定義した  $\{g \in G \mid g.o = o\}$  を  $o$  での固定部分群 と呼ぶ.

## 3.6 例

---

例:

$$\circ S^{n-1} = O(n)/B, \quad \text{ただし } B := \left\{ \begin{pmatrix} 1 & \\ & \alpha \end{pmatrix} \mid \alpha \in O(n-1) \right\}.$$

( $\because$ )  $o := e_1 \in S^{n-1}$  とおく.

[示すこと:  $B = \{g \in O(n) \mid go = o\}$ ]

( $\subset$ ) の証明は簡単.

( $\supset$ ) の証明には,  $O(n)$  の定義の条件を用いる.  $\square$

注意:

$\circ$  次のように略記することが多い:  $S^{n-1} = O(n)/O(n-1)$ .

レポート問題 (3):

$\circ$  上の ( $\supset$ ) の部分を示せ.

## 3.7 補足

---

まとめ:

- 集合  $M$  が等質  $\Leftrightarrow G/K$  と表示できる.
- 等質集合は,  $G$  と  $K$  の情報で完全に決まる.

等質な位相空間の場合:

- 位相群 (群 + 位相空間) を考える.
- $G/K$  も位相空間になる (商位相).

等質な多様体の場合:

- リー群 (群 + 多様体) を考える.
- $G/K$  も (しかるべき条件下で) 多様体になる.

# 4 等質集合の応用

## 4.1 射影空間

定義:

- $\mathbb{RP}^n := \{\ell \subset \mathbb{R}^{n+1} \mid 0 \in \ell : \text{直線}\}$  を  $n$ 次元実射影空間 という.
- $0 \neq x \in \mathbb{R}^{n+1}$  に対して,  $[x] := \{cx \mid c \in \mathbb{R}\} \in \mathbb{RP}^n$  と表す.

命題:

- $\mathbb{RP}^n = \text{O}(n+1)/(\text{O}(1) \times \text{O}(n))$ ,  
ただし  $\text{O}(1) \times \text{O}(n) = \left\{ \begin{pmatrix} \alpha & \\ & \beta \end{pmatrix} \mid \alpha \in \text{O}(1), \beta \in \text{O}(n) \right\}$ .

( $\because$ )  $\text{O}(n+1) \curvearrowright \mathbb{RP}^n$  は次で与えられる:  $g.[x] = [gx]$ .

推移的であることは, 球面の場合を考えれば示せる.

あとは  $o = [e_1]$  での固定部分群を求めれば良い. □

## 4.2 応用例: 部分多様体

---

命題:

$$\circ \mathbb{R}P^2 = O(3)/(O(1) \times O(2)) \subset \mathbb{R}^5.$$

( $\because$ )  $V := \{X \in M_3(\mathbb{R}) \mid \text{tr}(X) = 0, {}^tX = X\}$  とおく.

このとき  $V = \mathbb{R}^5$ .

次によって  $O(3) \curvearrowright V: g.X := gXg^{-1}$ .

[step 1:  $V$  の部分集合  $M$  を定める]

$$A := \begin{pmatrix} 2 & & \\ & -1 & \\ & & -1 \end{pmatrix} \in V \text{ とおく.}$$

$M := O(3).A = \{g.A \in V \mid g \in O(3)\}$  とおく (これを 軌道).

[step 2:  $M = \mathbb{R}P^2$  を示す]

$O(3) \curvearrowright M$  が推移的なことは容易.

$A$  における固定部分群  $= O(1) \times O(2)$  を確かめれば良い. □

## 4.3 補足

---

命題:

- 先の命題と同様に次が成り立つ:

$$\mathbb{RP}^n \subset \mathbb{R}^{(n+1)(n+2)/2-1} = \{X \in M_{n+1}(\mathbb{R}) \mid \text{tr}(X) = 0, {}^tX = X\}.$$

## 4.4 まとめ

---

まとめ:

- 等質空間  $G/K$  (幾何) は, 群  $G, K$  (代数) を使って研究可能.
- 行列群 (例えば  $GL_n(\mathbb{R})$  や  $O(n)$ ) は重要な例.
- 「等質空間の幾何 = 群論と線型代数を使った幾何」  
(注: イメージです)